

多文化共生学プログラム プログラム専門科目

区分	英語 対応	科目名（単位）	授業の概要
プログラム専門科目 （基盤科目）	○	現代英語研究 I （1 単位） Studies in Present-Day English I	現代英語の諸構文や語法・用法などを具体的な対象として、言語の形式と機能の結合様式に見られる画一性と多様性についての言語科学的な接近及び説明，すなわち経験科学としての現代英文法研究一に向けた研究への導入をはかる授業である。当該の言語現象にかかる先行研究の概観や日本語及びその他の言語との比較や歴史的事実の参照の他，英語の使用実態，とりわけ情報構造や発話行為，発話のモード等の機能的・語用論的な観点から興味深い一次資料を例とした事実観察・記述などを通して，英語の文法的諸特性を多面的によりよく理解し考察する方法を学び，言語事実という経験的基盤に立脚した文法記述の姿勢と方法を身につける。合わせて，一般言語理論構築の観点からの文法モデルの基礎的理解や，言語分析に必要な導入的・基礎的専門知識および言語一般に対する科学的思考法を身につけることをはかる。
	○	感情コミュニケーションと社会的共生 I （1 単位） Communication of Emotion in Multicultural Society I	社会的共生とは、文化、性別、ハンディキャップの有無など異なる背景をもつ複数の集団が、たとえ利害が対立していても相互に排他的にふるまうことなく、一定のレベルで対等な関係を維持しつつ生活している状況である。 この授業では、社会的共生の基盤となる感情と対人コミュニケーションに関する研究分野において、とくに表情を媒体にした感情のコミュニケーションに焦点を当てる。まず、感情、コミュニケーション、共感をキーワードとし、これらのキーワードに関する基礎的知見と最新の研究に関する情報を提供するとともに、他者の感情や心理状態への共感のプロセスに関する近年の研究や理論を紹介する。これらの知見と理論に基づき、感情コミュニケーションと共感が、どのように社会的共生の実現に貢献しうるのか、もしくは阻害要因として作用するのかについて検討する。
		文化人類学基礎講読 I（1 単位） Cultural Anthropology(Introductory Reading) I	この授業では、Kyoko Matsukawa, Akiko Watanabe, Zahra Babar による中東地域の移民労働者の文化人類学に関する英語著書の購読を通して、人の移動の現象が引き起こす社会への影響と移住者を受け入れる社会が人に与える影響について人類学的に理解することを目的とする。この授業は、学術的な英語論文の読解力を向上させることを目指す。

区分	英語 対応	科目名（単位）	授業の概要
プログラム専門科目 （基盤科目）		日本の文化と文学研究Ⅰ （1単位） Japanese culture and literatureⅠ	1950年代から1970年までの演劇史の流れを確認しながら、各年代を代表する劇作家の演劇作品を取り上げる。戯曲の読解と映像化された舞台の鑑賞を通して、メディアの多角的な分析力を養うとともに、文学作品の読解力・思考力を深めていく。作品読解・鑑賞を通して演劇が映し出す時代状況や社会についても考える。
		ヨーロッパ表象文化研究Ⅰ （1単位） Studies on European Culture and RepresentationⅠ	主にロシアを対象に、ヨーロッパ地域を視野に入れながら、19世紀から20世紀における文学・文化を多角的に分析する方法を学ぶ。 講義と合わせ、文学・文化理論の論文を講読し、対象となるテキストや文化事象をそれ自体として精密に分析するため、さらには隣接する諸領域との関連の中で捉え直すために必要な理論を習得する。また、歴史的・社会的事象、当該地域の文化史について、理解を深めるための講義も合わせて行う。 ロシア・フォルマリズムや構造主義、神話理論などを取り上げるが、概論の把握にとどまらず、理論の実践例となる論文の講読を行い、議論を通じて深い理解に到達することを目指す。 受講者には、理論の学習と合わせ、ゴーゴリ、ドストエフスキイの作品を題材に、理論を適用し、その整合性を批判的に検証する分析作業に取り組んでもらい、専門的な研究に向けた思考力を養う。
	○	多文化教育研究Ⅰ （1単位） Multicultural Studies in EducationⅠ	経済のグローバル化・ボーダレス化が進むにつれ、民族・文化等の違いがより強く意識されるようになってきている。従来、多文化論は、異なる文化背景を持つ人間同士が相互に「交流・理解できること」を前提に展開されてきた。ところが、紛争の絶えない世界の現実から、他者を理解したつもののミスマコミュニケーションが他者を理解する障害になるとも考えられる。そこで、本講義では、「理解可能な他者」を前提とすることよりも、越えられない「文化的な溝」について、歴史的、社会のおよび教育的見地から分析を試みると同時に、異なる民族や異なる文化背景を持つ人々が共に暮らす社会のあり方と、その実現を確固たるものにするための教育の有り方について探求する。多文化教育の理論や方法論、日米欧における多文化教育の共通点・相違点が生まれた社会的・歴史的背景についても考察を加える。

区分	英語 対応	科目名（単位）	授業の概要
プログラム専門科目（応用科目）		言語文化と言語発達Ⅰ （１単位） Language culture and language developmentⅠ	言語の発達に関する文献講読を行い、母語習得の過程について討議する。 その際、認知科学の知見も取り入れる。
		言語文化と言語発達Ⅱ （１単位） Language culture and language developmentⅡ	言語の発達に関する文献講読を行い、母語習得の過程について討議する。 その際、認知科学の知見も取り入れる。
	○	現代英語研究Ⅱ （１単位） Studies in Present-Day EnglishⅡ	一般言語理論の枠組みに立脚した現代英語文法の記述と説明という目標に向けた研究の従来成果の概観的理解と今後の展望を探るための方法論を学ぶとともに、現代英語の総合的な言語科学的理解をはかるためのやや発展的な授業である。 「現代英語研究Ⅰ」に引き続き、英語の諸構文や語法・用法などを具体的な対象として、言語の形式と機能の結合様式に見られる画一性と多様性を説明するための文法記述や理論モデルを追究する。とりわけ、情報構造や発話行為、発話のモード等の機能的な観点から興味深い事実に着目し、一次資料を活用した事実観察に基づく経験的基盤の強固な文法の記述及び説明を模索し、あわせてそのような観点からの現代英語の実態的な姿を幅広く理解する。また、発達心理学的な観点を取り入れた文法モデルという理論的観点から、構文間の関連や意味・機能や語用論、言語運用の観点を重視した事実観察及び文法記述の実際について学ぶ。
	○	感情コミュニケーションと社会的共生Ⅱ （１単位） Communication of Emotion in Multicultural SocietyⅡ	感情コミュニケーションと社会的共生Ⅰでの学習を踏まえ、異なる背景をもつ複数の集団が相互に排他的にふるまうことなく、一定のレベルで対等な関係を維持しつつ生活している状況としての社会的共生を阻害する問題について分析し、対応策を立案するための能力を身につける。いじめ、差別、ヘイトスピーチのような社会的排斥行動の状況とその背景にある、感情や共感性の問題を取り上げ、最新の研究成果を確認するとともに、その成果に基づいて対応策を議論する。具体的な対応策の例として、社会的排斥行動を予防するための教育モデルの立案を検討する。その際、感情コミュニケーションの基礎である感情コンピテンス（感情の読み取り、表出、制御など）と道徳性を育成するための教育に注目し、その現状を確認しつつ、より適切な教育モデルを構築することを目的とする。

区分	英語 対応	科目名（単位）	授業の概要
プログラム専門科目（応用科目）		日本表象文化研究Ⅰ （１単位） Studies on Japanese Culture and RepresentationⅠ	この授業では、ラジオ、テレビ、映画、演劇、文学などあらゆるメディアを横断しながら創作活動を展開した文学者たちの作品を考察する。安部公房、三島由紀夫、寺山修司といった作家たちのメディア表現を分析しながら、多面的な文化理解の力を養成する。特に三島由紀夫をめぐっては、能や歌舞伎など、日本の古典を現代的な視点から、あらたな演劇作品として創作していった事例について考察する。
		日本表象文化研究Ⅱ （１単位） Studies on Japanese Culture and RepresentationⅡ	この授業では、ラジオ、テレビ、映画、演劇、文学などあらゆるメディアを横断しながら創作活動を展開した文学者たちの作品を考察する。秋元松代、三島由紀夫、寺山修司といった作家たちのメディア表現を分析しながら、多面的な文化理解の力を養成する。特に寺山修司は、従来の映画概念・演劇概念を解体していくような実験的な創作活動を展開しており、その解説は芸術理念そのものの問い直しへと通ずるだろう。
	○	多文化教育研究Ⅱ （１単位） Multicultural Studies in EducationⅡ	本講義では、異なる民族や文化背景を持つ人々が共に暮らす社会のあり方と、その実現を確固たるものにするための教育の有り方について探求する。講義は三部構成からなる。第一部では、「文化」や「多文化」などについての内包と外延を再確認すると共に、現在日本における多文化論争・多文化教育の現状を整理し、欧米における多文化論争・多文化教育の現状と比較検討する。第二部では、日米欧における多文化教育の共通点・相違点が生まれた社会的・歴史的背景について検証を行う。第三部では、「理解可能な他者」を前提とする多文化教育論から、越えられない「文化的な溝」を直視する多文化教育論まで、多様な多文化教育理論と方法について紹介し、日本の文化・歴史に照らし合わせてその可能性と限界について考察を加える。

区分	英語 対応	科目名（単位）	授業の概要
プログラム専門科目 （応用科目）		国際交流と日本語教育Ⅰ （１単位） International Exchange and Japanese Language EducationⅠ	本講義では、いわゆる「日本語教育学」の内側に止まらず、言語・学習・教育を対象としたさまざまな研究領域の成果に学び、各受講者が自身の研究テーマとの関連で、現今の国際社会において〈日本語で意思疎通する〉ことの意義を明確にし、理解を深める。海外へ出てネイティブの日本語教師として活動する可能性のある人、および、帰国後に自国学習者に日本語を教えたいと考える留学生に対し、ひとつの問題発見・問題解決の場を提供する。言語コミュニケーションの特質について再考し、外国語教育学において重視されがちな４技能のバランス良い発達という方向性を懐疑的に見直す。また、世界の言語政策（特に言語普及政策）に関する資料購読とディスカッションをし、学習者にとってのニーズに関して考察する。さらに、中・上級の長文読解・聴解問題を取り上げ、文化論的検討を行うとともに、日本語能力を測る手段としての妥当性を検討する。
		国際交流と日本語教育Ⅱ （１単位） International Exchange and Japanese Language EducationⅡ	本講義では、いわゆる「日本語教育学」の内側に止まらず、言語・学習・教育を対象としたさまざまな研究領域の成果に学び、各受講者が自身の研究テーマとの関連で、現今の国際社会において〈日本語で意思疎通する〉ことの意義を明確にし、理解を深める。海外へ出てネイティブの日本語教師として活動する可能性のある人、および、帰国後に自国学習者に日本語を教えたいと考える留学生に対し、ひとつの問題発見・問題解決の場を提供する。日本政府の言語普及活動とそこにおける日本語能力のレベル設定に関する資料購読とディスカッションをすることで、妥当な学習成果の評価方法について考える。また、日本語とそれ以外の受講者の母語とを比較対照し、学習上の難点とされることの特質と原因を明らかにする。さらに、中・上級の長文読解問題を取り上げ、文化論的検討を行うことで言語理解とそれを助ける文化背景に関する知識との間の関係について考察する。

区分	英語 対応	科目名（単位）	授業の概要
プログラム専門科目（応用科目）	○	アメリカ文化研究Ⅰ （1単位） Studies in American Culture I	アメリカ合衆国の文化や歴史について多元的な観点から概観する。特に民族的また地域的な多元性について考察する。言語については米国英語の歴史的発展（イギリスからの移民英語の混交と変遷）と地域的拡散、地域については北東部、南部、中西部、西部、（南西部）の歴史的発展、宗教については、北東部における清教徒の伝統、英国国教会以外の各セクトの移住と拡散、カトリックへの排斥、ユダヤ教の北東部を中心とした広がり、イスラム教など多元的に扱うが、市民宗教や国民統合としてのキリスト教の役割も考察する。さらに、思想については、米国で生まれたプラグマティズムの発展に注目し、民族については、旧移民（北西ヨーロッパ系）と新移民（南東ヨーロッパ系）、先住民、アフリカ系米国人、アジア系（主に日系）、ユダヤ系、アラブ系、ヒスパニック系などの多元的歴史を考察する。
	○	アメリカ文化研究Ⅱ （1単位） Studies in American Culture II	「アメリカ文化研究Ⅰ」で学んだ知識をもとに、さらに合衆国の文化や歴史について、民族多元的な観点から考察する。まず植民地以前の先住民社会、スペインやフランスの植民を概観したうえで、英国植民地の起源と発展、その中での民族的分布や歴史を考察する。その際、奴隷としてアフリカから「動産」として運搬された人々も対象とする。次に、独立時、独立戦争における民族的な関わりを分析する。さらに19世紀前半、旧移民を中心としたナショナリズムと膨張主義の中での人種という疑似科学の発展、奴隷制の拡大、先住民の強制移住、メキシコ系の排斥などを扱う。19世紀後半から20世紀にかけては「新移民」（南東ヨーロッパ系）の流入による新たな民族構成と民族排斥、中国系や日系移民の流入によるそれを同時期の問題として考察する。20世紀後半については、公民権運動とそれがもたらした後半な少数民族の運動を扱う。

区分	英語 対応	科目名（単位）	授業の概要
プログラム専門科目（応用科目）	○	イギリス文化研究Ⅰ （１単位） Culture of BritainⅠ	芸術を中心にして、イギリスの文化を考察する。芸術には、絵画、彫刻、工芸、庭園、建築等が含まれる。文献、画像、映像等の資料を使い、イギリスの芸術の様式に注目して、基本的な情報をまずは確認することが大きな目標となる。これについては、講義が中心となるが、受講生の積極的な発言も求める。次に、イギリスの芸術についての基礎的な情報を元に、文化、芸術について、受講生の関心に基づいて考察・議論することによって、理解を深める。ここでは、とりわけ受講生同士の議論が求められる。議論の際には、イギリスのみならず、他地域の文化、芸術との比較も行う。このことで、イギリスの文化、芸術をより広い視点から理解することにつながる。また、本授業では、芸術作品についての様式分析を議論の中心にすえることによって、フィールドワークを含む専門的な調査研究を行うための基礎的な訓練も行う。
	○	イギリス文化研究Ⅱ （１単位） Culture of BritainⅡ	イギリス文化研究Ⅰにおいて行った、様式分析に基づいた、基礎的な知識の獲得と議論とを踏まえて、より専門的な研究に進むために、学術文献の精読と発表、18世紀の美術理論書の精読と発表、議論を活動の中心とした演習を行う。あわせて、文化研究においては必須となる、歴史資料（本授業においては芸術作品）の活用についても、フィールドワークの方法論を念頭に議論する。 学術文献は、美術、建築、絵画、装飾芸術について、20世紀のイギリスで書かれた最も代表的な文献を選択する。また、一次資料については、ヨーロッパの議論を基礎に18世紀に理論化されたイギリスの美術理論書の中でも、美術アカデミーにおける基本書とされたレノルズのほか、イギリスの美を考える上での基礎資料であるホガースの理論書を選択する。これらの演習活動を、最終的なレポートにまとめて提出する。
		フランス思想・文化研究Ⅰ （１単位） Studies on French Thought and CultureⅠ	現代社会が直面する多様な問題を的確にとらえ、ますます複雑化する社会の変化に柔軟に対応していくためには、文献や資料の論理的な読解力や要約力を養うこと、そして過去の事例から学びつつ、未来を切り開く知識や思考力を身につけることがきわめて重要である。本授業ではフランス思想史・文化に関する邦訳文献を講読し、歴史や哲学に関する理解を深めながら、多文化共生社会に関する文化的・社会的な諸問題を理解し解決していくための手掛かりを探る。講義形式の授業であるが、授業内では各自の事前準備に基づいた意見発表や作業が求められる。

区分	英語 対応	科目名（単位）	授業の概要
プログラム専門科目（応用科目）		フランス思想・文化研究Ⅱ （１単位） Studies on French Thought and Culture Ⅱ	現代社会が直面する多様な問題を的確にとらえ、ますます複雑化する社会の変化に柔軟に対応していくためには、文献や資料の論理的な読解力や要約力を養うこと、そして過去の事例から学びつつ、未来を切り開く知識や思考力を身につけることがきわめて重要である。本授業ではフランス思想史・文化に関する邦訳文献を講読し、歴史や哲学に関する理解を深めながら、多文化共生社会に関する文化的・社会的な諸問題を理解し解決していくための手掛かりを探る。講義形式の授業であるが、授業内では各自の事前準備に基づいた意見発表や作業が求められる。
	○	西洋史研究Ⅰ（１単位） European Histories Ⅰ	本授業は西洋史・ヨーロッパ史・ドイツ史を専門的に学ぶための演習・授業である。とくに１６世紀から現代までを対象として、具体的には以下のようなテーマ・課題を扱い、文献理解と講義、討論を行い、総括する。（１）西洋史研究の方法、つまり文献探索、論文読解、先行研究理解などを教授すること、（２）宗教改革後のヨーロッパ宗教史を主要国別に整理し、国教会制という制度を理解させること、（３）フランス革命に始まる「世俗化」概念を説明すること、（４）１６世紀から１９世紀における民衆宗教、つまり制度化されたキリスト教とは異質の民衆レヴェルの信仰を説明、理解させること、（５）ドイツを例に、教区教会とは何か、その役割を理解させること、（６）世俗共同体とは別の教区共同体の意味と機能を理解させること、（７）教会が担った洗礼・結婚・葬儀の実態を理解させる。
	○	西洋史研究Ⅱ（１単位） European Histories Ⅱ	本演習は西洋史、ヨーロッパ史、特にドイツ史を専門的に学ぶための授業である。ここではとりわけ、葬儀・埋葬・墓地の歴史について以下のようなテーマ・課題を取り上げ、基礎文献理解と講義、討論等を行い、総括する。（１）ドイツ・カトリック教会の葬儀規定についての理解をはかる、（２）死から埋葬までの過程の実態についての理解をはかる、（３）柵にも囲われず、世俗の様々な事象と混淆していた「荒れた」教会墓地の実態について理解する、（４）宗教改革によって聖人崇拜から解放されたプロテスタント墓地の実態について理解する、（５）１９世紀以降、墓地市街から郊外に移設されていった経緯と意味を理解する、（６）１９世紀の世俗化された墓地の実態を理解する、（７）ドイツにおいて、火葬が始まり、それが普及していく過程と意味を理解する。

区分	英語 対応	科目名（単位）	授業の概要
プログラム専門科目（応用科目）		性と人権論Ⅰ（１単位） Sexuality and Human Rights I	セクシュアル・ライツ（性的権利）は基本的人権であり、包括的性教育（comprehensive sexuality education）はセクシュアル・ライツを理解し、行使する主体となるために必須である。性に関する必要な知識とスキル、人間関係のあり方についての学びを踏まえ、性的自己決定能力を高めることがもとめられる。そこで本授業は、人間の性と人権を多角的に学ぶことを通して、人権を基軸としたセクシュアリティとは何かを科学的な知識を基に考察し、自らが性的主体者として自己形成をしていくことを目的としている。国際人権規約、女性差別撤廃条約、子どもの権利条約等における人権と性の記述を確認するとともにどのような勧告が出されているかを確認する。生理学的知見から関係性の学び、性の問題まで包括的な内容を押さえる。その際に世界と日本の実情を紹介するとともに、課題を解決するために様々なレベル（個人から政策レベル）でどのような取り組みが可能か具体化することを各回に設定する。
		性と人権論Ⅱ（１単位） Sexuality and Human Rights II	日本において、人工妊娠中絶率ならびに性感染症罹患率、性暴力問題の増加等、性に関わる様々な問題があるにもかかわらず性教育はナショナルカリキュラムとして位置づけられていない。そこで本授業では国際的なセクシュアリティ教育のスタンダード（ユネスコ等）の到達点と課題を確認する。そして栃木県を含む日本における制度上の特徴をインタビュー調査もしくはフィールド調査にて明らかにする。人間の性と人権をより多角的に学ぶことを通して、自らが性的主体者として人権を軸とした社会をどのように創っていけばよいかを具体的に考えることを目的としている。

区分	英語 対応	科目名（単位）	授業の概要
プログラム専門科目（応用科目）		東アジア比較文学比較文化研究Ⅰ（1単位） Comparative Studies on East Asian Literature and CulturesⅠ	東アジアは植民地支配や戦争の時期を挟みながら、実に多様で豊かな人的かつ知的交流が行われていた地域である。例えば19世紀末から20世紀初頭においては、魯迅や李光洙、金東仁といった中国と朝鮮の若き知識人たちが日本に留学して日本文学や日本語に訳された西欧文学を手掛かりとして「近代文学」のあるべき姿を獲得するなど多くの知的な文学交流が行なわれている。反日政策下で政府同士の公式的な交流が絶たれた戦後においても、個人レベルでの知的な文化交流（映画など）が盛んに行なわれている。21世紀に入ると、韓国や中国、台湾他中華圏では日本のアニメや漫画、ゲーム、ドラマなど日本の大衆文化がブームとなり、とりわけ村上春樹の小説が各国でベストセラーになるなど「日流」とよばれる現象が巻き起こっている。一方、日本でも「韓流」「華流」とよばれる韓国や中国、台湾の大衆文化への関心が高まっている。そうした知的生産性を持った空間として東アジアは捉えられるべきだと考えている。 そこで本授業では、1910年代から20年代、30年代にかけて東アジア各国で翻訳（翻案）発表された日本文学者の作品をとりあげ、それらの作品が東アジアの知識人たちに受容された背景と意図、そして社会と文化に与えた影響について考察を行なう。

区分	英語 対応	科目名（単位）	授業の概要
プログラム専門科目（応用科目）		東アジア比較文学比較文化研究Ⅱ（1単位） Comparative Studies on East Asian Literature and Cultures Ⅱ	東アジアは植民地支配や戦争の時期を挟みながら、実に多様で豊かな人的かつ知的交流が行われていた地域である。例えば19世紀末から20世紀初頭においては、魯迅や李光洙、金東仁といった中国と朝鮮の若き知識人たちが日本に留学して日本文学や日本語に訳された西欧文学を手掛かりとして「近代文学」のあるべき姿を獲得するなど多くの知的な文学交流が行なわれている。反日政策下で政府同士の公式的な交流が絶たれた戦後においても、個人レベルでの文化交流（映画など）が盛んに行なわれている。21世紀に入ると、韓国や中国、台湾他中華圏では日本のアニメや漫画、ゲーム、ドラマなど日本の大衆文化がブームとなり、とりわけ村上春樹の小説が各国でベストセラーになるなど「日流」とよばれる現象が巻き起こっている。一方、日本でも「韓流」「華流」とよばれる韓国や中国、台湾の大衆文化への関心が高まっている。そうした知的生産性を持った空間として東アジアは捉えられるべきだと考えている。 そこで本授業では、韓国や中国など東アジア地域の近代文学の成立に深く関わった日本近代文学者の中でもとりわけ有島武郎に注目し、東アジアの近代文学者たちが有島武郎の何を、そしてそれをどのように受容したのかを解明することによって、「アジアの欠落」が指摘される有島武郎が東アジアの知識人たちと問題意識を共有していたことについて考察を行なう。
		人権と法Ⅰ（1単位） Legal Perspectives on the Human Rights I	われわれは、死刑制度、夫婦同氏制度、犯罪の被疑者の実名報道等、わが国で採られている制度や社会事象について、それを「当然のこと」ないし「絶対的なもの」として受け入れてしまいがちである。 本講義では、まず、六法全書の使い方、文献収集およびリーガルリサーチの方法などの法学を学ぶ基礎を修得したうえで、法の解釈や法的意見表明の技術について学修する。 次に、わが国の法制度や社会事象を、憲法の人権保障の視点や国際的な議論などを踏まえて検討する。わが国の判例および学説の批判的考察ならびに比較法的観点からの考察を通じて、現行制度は法の理念に沿って運用されているのか、実務と理念との乖離はなぜ生じるのか等を検討したうえで、法の理念から「本来あるべき姿」を追究する。 なお、授業で取り上げるテーマについては、受講生との相談により決定する。

区分	英語 対応	科目名（単位）	授業の概要
プログラム専門科目（応用科目）		人権と法Ⅱ（1単位） Legal Perspectives on the Human Rights II	わが国で採られている法制度は、われわれ主権者の選択の結果である。例えば、死刑制度に関しては、存置論および廃止論が存在するが、現在、死刑が存置されているのは、主権者の「存置すべき」という決断の結果である。しかしながら、その選択は、果たして「正しい」選択だったのか？対立する見解を十分検討し、メリット、デメリットを比較衡量したうえでの決断だったのか？憲法の人権保障の観点や国際的な議論を十分考慮した決断だったのか？ 現在、われわれが直面する問題には、いずれの選択にも、それを支える「正しい」根拠がある。しかし、われわれは、相反する正しい見解の中から、主権者としてひとつの答えを選択しなければならない。 本講義では、受講者が選択したテーマにつき、自己の主張を支える根拠を徹底的に調査し、検討を深める態度を修得するとともに、なぜ社会がそのような選択をしたのか、その選択は果たして適切なのかを法の理念から考察する。
	○	シティズンシップ教育Ⅰ（1単位） Citizenship Education I	定住する外国人の増加や2020オリンピック・パラリンピックを契機とした多文化共生社会推進の機運の高まりを受け、多文化共生社会を形成する一員としての意欲や態度としてのシティズンシップ(市民性)を理解し、シティズンシップを育成するための教育、すなわちシティズンシップ教育が必要となってきた。本講義ではこのような社会の要請を前提に、シティズンシップ教育の在り方や進め方について理解を深めるために、主として日本での現状について文献や資料を読み議論を深める。また、日本のシティズンシップ教育の議論に影響を与えている英国におけるシティズンシップ教育の展開や、シティズンシップ教育の具体的実践領域として主権者教育、福祉教育、サービスマーケティング、ボランティア学習を取りあげ、実践上の課題についても検討する。
	○	シティズンシップ教育Ⅱ（1単位） Citizenship Education II	本講義では、Global Citizenship Education: A Guide for Policymakers など UNESCO が発行している資料を読むことで、シティズンシップ教育が国際的にどのように取り扱われているかを理解することを通じて多様な文化や考え方を背景としたシティズンシップ教育の多様性について理解することを目的とする。

区分	英語 対応	科目名（単位）	授業の概要
プログラム専門科目 （応用科目）		日本文学研究Ⅰ （１単位） Studies on Japanese LiteratureⅠ	日本近代文学のメインジャンルとなった「小説」は、同時代の社会と深く切り結んで創出された。どんなに独創的な作家といえども時代と無関係ではない。むしろ独創的表現者は、時代の変化を鋭敏に捉え、独自の観点で作中に取り入れ、虚構の生成を通して様々な社会問題への批評的視点を提示している。本授業では、明治・大正・昭和戦前期にかかれた短篇小説を、年度毎のサブテーマに応じて、複数編取りあげ、同時代評や先行研究を提示しつつ、作中に描かれた社会事象や文化（戦争・法律・婚姻・教育・労働・職業・衛生・医療・交通・犯罪・出版・ジャーナリズム・思想・学術・芸術・芸能・観光・性風俗・服飾・食文化・建築などなど）への注釈的検証を行い、作品の表現機構を読み解くことで、文学と時代との関わり、その批評性を具体例に則して考察する。
		日本文学研究Ⅱ （１単位） Studies on Japanese LiteratureⅡ	文学作品は時代と切り結んで生成される。どんなに独創的な作家といえども時代と無関係ではない。むしろ独創的表現者は、時代の変化を独自の観点で鋭敏に捉え、作中に摂取し、詩的言語を用いた虚構の生成を通して社会への批評性を持ち得ている。本授業では、明治・大正・昭和戦前期の約 50 年にわたり日本小説界の第一線で活躍し、「古今に独歩する文宗なり」（芥川龍之介）と称された泉鏡花の小説・戯曲を取りあげる。同時代評や先行研究を随時紹介提示しつつ、作中に描出、あるいは引用された事象・事物・文化（戦争・犯罪・貧民・都市・地方・風俗・地誌・災害・服飾・建築・動植物・出版・宗教・教育・学術・芸術・芸能・口碑伝説・歌謡等々）の詳細な検証を行い、作品成立の背景と受容の諸相を多角的に分析し、作品の表現手法や物語機構を読み解くことで、鏡花文学と同時代との関わり、さらには近代日本への批評性を具体例に則して考察する。

区分	英語 対応	科目名（単位）	授業の概要
プログラム専門科目 （応用科目）		日本文化研究Ⅰ （1単位） Studies in Japanese Culture Ⅰ	日本文化は、伝統的には中国からの影響を受け、さらに、西洋からの影響を受けて近代化した。近代化を経て、現代に継承されている日本文化には多文化との融合性が内包されている。その一方で、日本文化には、同質性が高いという特徴があり、日本文化以外の文化、他文化を異文化として認識する傾向が強い。このような特質を持つ日本文化を基盤として、多文化共生を考えるためには、自己と他者の差異をとらえるのみにとどまることなく、他者との異質性と同質性の両面から考察することが重要である。多文化共生に関連する先行研究を検討し、自文化を土台として、他文化を相対化してとらえるための高度な思考訓練を行う。日本文化研究と他分野の研究の異質性と同質性を活かし、融合して、多文化環境における日本文化について探究する。
		日本文化研究Ⅱ （1単位） Studies in Japanese Culture Ⅱ	日本文化は、明治時代以降の近代化を経て、現代に至っている。近代化を経て、現代まで継承されてきた日本の伝統文化は、歴史の中で培われた特質を守りながら、新たに異質なものを取り入れることを試み、その享受者や研究者を、日本から世界に広げて国際化した。日本の文化的営為では、自らが存在する現実の世界から得られた素材に、個人の実感が重なり、思索が加えられ、時代の状況、社会の動きが反映される。このようにして、物事の本質をとらえて現前される文化現象では、人間が生きる世界の森羅万象の真実が表出され、普遍性が獲得される。日本文化が、近代化と国際化を経て、どのように多文化性を包含し、普遍性を内包する文化現象となり得て、多文化共生を具現できるか、そして、そこには、どのような限界があるか、先行研究を検討し、考察を進める。
		日本の文化と文学研究Ⅱ （1単位） Japanese culture and literature Ⅱ	1970年代から1990年代までの演劇史の流れを確認しながら、各年代を代表する劇作家の演劇作品を取り上げる。戯曲の読解と映像化された舞台の鑑賞を通して、メディアの多角的な分析力を養うとともに、文学作品の読解力・思考力を深めていく。作品読解・鑑賞を通して演劇が映し出す時代状況や社会についても考える。

区分	英語 対応	科目名（単位）	授業の概要
プログラム専門科目（応用科目）	○	言語普遍性と英文法研究Ⅰ （１単位） Language Universals and the Study of English Grammar I	多文化共生について考察するには、文化を内包している言語に着目することが有効である。そして、このような性質をもつ言語を研究する場合、すべての言語に共通する普遍的性質を仮定したうえで、個別言語の特徴を捉えていくことが重要である。本授業では、研究科としての言語研究に必要な基本的・一般的な内容の教授に重点を置き、言語普遍性の考えに照らして、英語という個別言語に焦点をあてて考察していく。具体的には、多文化共生における英語の役割、英語に見られる基本語順などの文法、子音と母音・文アクセント・イントネーションなどの音声、意味や文化背景を担う語彙、意味と形式の対応関係、英語によるコミュニケーションの観点から論じていく。また、こうした観点から英語と日本語などの言語比較を行い、外国語学習のための英文法についても取り上げる。最後に言語に関する課題の提出を求める。
	○	言語普遍性と英文法研究Ⅱ （１単位） Language Universals and the Study of English Grammar II	生成文法、言語普遍性、意味機能や外国語教育の立場からアプローチする英文法研究に関する各文献を英語の原書で読み、講義も行う。具体的には、生成文法の原理とパラ미터による英文法の分析、言語類型論に見られる言語普遍性、語用論や認知言語学が扱う意味機能を重視した英文法、外国語学習のための英文法について取り上げる。また、多文化共生と言語の関係にも留意する。さらに、受講者ひとり一人に現在興味をもっている文献を選んでもらい、内容についての報告を求めてからクラス全体で討論するという場も設ける。こうした個人別の文献購読では、対象言語を英語に限定せず、理論的な枠組みも任意とする。英語と日本語などの言語比較、言語と文化の関係、多文化共生における言語の役割、外国語教育を扱った文献なども可能とする。最後に言語に関する小論文の提出を求める。

区分	英語 対応	科目名（単位）	授業の概要
プログラム専門科目（応用科目）	○	英語音声学Ⅰ（1単位） English Phonetics I	英語の音声に関する文献を読んだり、実際の音声を聞いたりしながら、英語音声学の重要な概念を英語音声と英語音声教育の両面から学修する。本コースでは、英語音声では、生成、知覚、強勢、リズム、イントネーションに焦点を当て、英語音声教育では問題点と方法論に焦点を当てる。扱う文献をもとに、受講生が英語を学習する際に、母語の影響のためにモデルとしている英語音声とどのような違いが生じているか、また、どのくらい正確に英語音声を修得すべきかなど受講生が現実に関面する課題に関する議論も行う。受講に当たり、英語の発音記号が正確に読めることと、標準イギリス英語と標準アメリカ英語の音声に関する知識とある程度の運用能力を前提条件とする。文献の内容を単に理解するだけでなく、書かれている例文を正確に読めることも重要な学修項目である。そのため、発表では発音の正確さも評価対象とする。
	○	英語音声学Ⅱ（1単位） English Phonetics II	英語音声学Ⅰで学修した英語のイントネーションに関して、指定教科書と付属の音声資料を活用しながら、詳細に学修する。教科書に基づき授業を進めるので、教科書の購入は必須である。本コースでは教科書の説明に従い、英語のイントネーションを tone（音調）、tonicity（音調核の位置）、tonality（音調単位への分割）という概念に分け、その順番で多くの例を用いながら分析する。英語のイントネーションの特徴を正確に理解することに加えて、音声資料に録音されている例文を正確に聞き取り、モデルと同じように発音できることも重要な学修項目である。さらに、録音されていない例文を、そのイントネーション記号を見ながら正確に発音できることも大切である。そのため、発表では発音の正確さも評価対象とする。本コースで学修する英語のイントネーション理論を英語教育にいかに応用できるかに関しても議論を通して考える。

区分	英語 対応	科目名（単位）	授業の概要
プログラム専門科目（応用科目）	○	英語学研究Ⅰ（1単位） English LinguisticsⅠ	英語統語論と英語形態論への理解を深めながら、一般文法理論とのかかわりにも注意を払う。研究活動への基礎を固めるために、専門文献の読解力を養いつつ、いくつかの主要なアプローチについて、思考法の要諦を学ぶ。その際、現代英語を具体例に取り上げながら考察を深めるが、本コースで特に注意を払う点として、話し言葉と書き言葉の対比、標準的な言葉と非標準的な言葉の対比、自発的な言葉と準備された言葉の対比、および文法と使用（用法）の対比を挙げることができる。このような点から得られる知見は、構文、オンラインでの処理、言語類型論、第一言語習得理論などの様々な領域において、自発的な話し言葉の研究が不可欠であるということである。授業は主として講義形式であるが、第7,8回目の「文献講読と討論」を含め、受講者主体のレポートやディスカッションも取り入れていく。
	○	英語学研究Ⅱ（1単位） English LinguisticsⅡ	現代英語を具体例に取り上げながら、統語論・形態論・意味論の概要を学び、いくつかのトピックについて各論的研究を行う。その際、現代の主要な文法理論を概観しながら、それらの問題点を指摘し、その代案となる内包的・非自律的・動態的な文法理論の可能性を探る。言語類型論・認知言語学・発達言語心理学・通時言語学の成果を援用する。より具体的には、英語学研究Ⅰに引き続き、自発的な話し言葉に対して特に注意を払う。自発的な話し言葉における節や句などの統語構造は、規則的な生起が認められ、パフォーマンスにおける誤りとは捉えられず、また書き言葉における統語構造とその複雑性や種類が大きく異なる。また、自発的な話し言葉におけるディスコースの体系も、書き言葉におけるそれとは異なり、独自の組織化を行っている。授業は主として講義形式であるが、第7,8回目の「文献講読と討論」を含め、受講者主体のレポートやディスカッションも取り入れていく。

区分	英語 対応	科目名（単位）	授業の概要
プログラム専門科目（応用科目）	○	外国にルーツをもつ子ども・青年と教育Ⅰ （１単位） Studies on Immigrant ChildrenⅠ	本授業では、多文化共生に関して、わが国で現代的な課題になっている「外国人児童生徒教育」の問題を取り上げる。そして、（１）国際的な移民問題、（２）日本における在日朝鮮人と彼らに対する教育、（３）ニューカマーと彼らに対する教育、（４）就学や高等学校・大学進学問題、（５）先進地域（愛知県豊田市・小牧市、神奈川県大和市など）の教育実践、特に母語・母文化教育を重視し、より自分らしく生きられることをめざした教育実践、等に関して、意義、歴史的背景、現状、論点、課題がわかるように講義を行う。また併せて各回の授業において、関連するテーマの代表的な先行研究を批評し、研究の余地も明らかにしながら当該分野の研究を行うための準備ができるようにする。毎回の授業では受講者による意見発表・意見交換を行い、自ら考えざるを得なくなる機会を設け、理解が深まるようにする。
	○	外国にルーツをもつ子ども・青年と教育Ⅱ （１単位） Studies on Immigrant ChildrenⅡ	本授業では、わが国で「外国人児童生徒教育」として現代的な課題になっている、多文化共生に関する課題を取り上げる。そして、「外国にルーツをもつ子ども・青年と教育Ⅰ」での学習を基礎として、（１）適応指導・日本語指導・アイデンティティ形成のための指導の内容と方法、（２）日本語指導教室の果たしている役割および同教室の運営、（３）学級・ホームルーム担任の指導のあり方、（４）学校の指導体制・教育委員会等の教育行政の役割、等に関して、意義、歴史的背景、現状、論点、課題がわかるように講義を行う。また併せて各回の授業において、関連するテーマの代表的な先行研究を批評し、研究の余地も明らかにしながら当該分野の研究を行うための準備ができるようにする。毎回の授業では受講者による意見発表・意見交換を行い、自ら考えざるを得なくなる機会を設け、理解が深まるようにする。

区分	英語 対応	科目名（単位）	授業の概要
プログラム専門科目（応用科目）		芸術学研究Ⅰ（1単位） Studies on Theory and History of Arts I	美術史・芸術学の体系的知識を軸として、美術史の変遷における近現代の美術概念の変容などを主要なテーマとして取り上げる。歴史と理論から美術作品と文化の生成を探究する。日本と西洋の近現代美術を対象に、個別の作家の作品変遷、複数の作家間、時代、文化の異なる作品等の比較研究を取り上げる。日本美術では、特に明治期から今日までの美術受容に焦点をあて日本における美術概念の生成とそれにかかわる作品や歴史的な変遷について捉える。そのために西洋美術史の詳細な理解を基盤とし、日本と西洋の美術の比較から、差異、独自性、共通性を導き出す。また、美術史学の成立とその変遷を各時代の概念から理解し、今日、美術史・芸術学に取り組む上で必要な方法論を探究する。講義に加え、毎時間のテーマに沿った小レポートの発表と意見交換により、専門的な理解を深める。
		芸術学研究Ⅱ（1単位） Studies on Theory and History of Arts II	美術史・芸術学の体系的理解を活用し得る専門性の獲得を目指す。芸術学研究Ⅰで取り上げた近代の美術概念の変容を発展的に扱い、日本と西洋の美術の交流、日本における近代の西洋美術受容などを主要なテーマとし、歴史と理論から美術作品と文化の生成を探究する。日本と西洋の近現代美術や芸術学緒論の専門的な学的考察を行なう。近代を節目とする美術概念の大きな変容を歴史と理論、個別の美術作品から探究し、今日の美術が近代までの様式概念や近代以降の諸芸術運動とは異なる地平で展開されている状況を考察する。また、日本と西洋の対比的な見方に加え、美術におけるグローバリズムと個別性(地域性)を学術的に捉える。美術史・芸術学の文献屋や諸理論を、受講者の関心に基づく専門的研究に取り入れることができるよう学術研究にあたるための素養を高める。

区分	英語 対応	科目名（単位）	授業の概要
プログラム専門科目（応用科目）		音楽創作文化研究Ⅰ （1単位） Studies on Creation of MusicⅠ	人類の悠久の歴史において、音楽創作（作曲）行為が連綿と続けられてきた。それは、言葉に依らない修辞学（wordless rhetoric）、すなわち、表現の対象や自己の内面的真実や思考を相手（受容者・聴き手）に対して感覚・観念の両面から説得力をもって伝達するための行為、およびその技術にほかならない。そのような音楽創作が、人と人とのコミュニケーションおよびそれによって成立する文化的社会において、どのような意味を持つのかを探究する。中世から現代までの1000年以上の時間的範囲にわたる西洋音楽を中心とした歴史的なレガシー（各々の時代を代表・象徴する音楽作品）を教材として、その時代背景（社会的情勢および時代ごとの音楽理論の状況）を踏まえながら、作品の純音楽的な構造（作曲法や形式論）を分析することにより、それらのコミュニケーション媒体としてのありようを探り、それぞれの音楽創作の持つ文化的・社会的意味を考察する。
		音楽創作文化研究Ⅱ （1単位） Studies on Creation of MusicⅡ	人類の悠久の歴史において、音楽創作（作曲）行為が連綿と続けられてきた。それは、言葉に依らない修辞学（wordless rhetoric）、すなわち、表現の対象や自己の内面的真実や思考を相手（受容者・聴き手）に対して感覚・観念の両面から説得力をもって伝達するための行為、およびその技術にほかならない。そのような音楽創作が、人と人とのコミュニケーションおよびそれによって成立する文化的社会において、どのような意味を持つのかを探究する。「音楽創作文化研究Ⅰ」におけるレガシー（西洋音楽史上さまざまな時代を代表・象徴する音楽作品）の分析・考察を踏まえ、当授業では、多様な作曲法や形式理論を駆使して、音楽創作を実践する。それにより、音楽創作のコミュニケーション媒体としてのありようを探り、音楽創作の持つ文化的・社会的意味を、実際の行為を経験することを通して考える。

区分	英語 対応	科目名（単位）	授業の概要
プログラム専門科目（応用科目）		西洋近現代哲学研究Ⅰ（1単位） Studies on Modern and Contemporary Philosophy I	「西洋」とは何か、「哲学」とは何か、という大前提を問うことから始め、次に、古代ギリシャから現代哲学にいたるまでを概観する。その際、ヘーゲルの『歴史哲学講義』（英訳と日本語訳を併用）を講読しながら、哲学史そのものの意味についても考える。その上でとくに「近代」と「現代」に着目し、「科学」と「自由」を主軸に、「西洋哲学」の本質およびその問題点を探っていく。併せて、古典テキスト（カント「啓蒙とは何か」）、および、現代哲学のテキスト（ヨナス『責任という原理』）を講読する（英訳と日本語訳を併用）。そのことを通じ、先人たちの哲学・思想と現代社会に生きる我々のそれとの比較および前者から後者への影響について考えながら、我々が直面する現代社会における応用倫理の諸問題（生命倫理・医療倫理・環境問題・情報倫理等々）を最終的に考察する。
		西洋近現代哲学研究Ⅱ（1単位） Studies on Modern and Contemporary Philosophy II	「西洋哲学史研究Ⅰ」の講義を前提に、引き続き「近代」と「現代」の哲学に着目し、「科学」と「自由」を主軸に、哲学的思考法を身につける。そのために、専門テキスト講読に取り組む（ヘーゲル『精神現象学』『大論理学』および、ヨナス『生命の哲学』）。哲学のテキスト（英訳と日本語訳を使用）は、早く多く読むことは求められず、むしろ、少しずつ一つ一つの「概念」の意味を履修者相互の対話を通じてじっくり読む説くことが目指される。テキストの選択は、履修者の希望関心に応じて変更する場合もあるが、いずれにしても、哲学・思想のテキスト講読を通じ、「問題」を言葉で論理的に整理し、その言葉ないし概念が担う哲学・思想史的背景を学ぶ。最終的には、現代社会が直面する応用倫理の諸問題（生命倫理・医療倫理・環境問題・情報倫理等々）にアプローチするための一つの手立てとして、「生命とは何か」という問題を、哲学の立場から学際的視点において考察する。

区分	英語 対応	科目名（単位）	授業の概要
プログラム専門科目 （応用科目）		日本史研究Ⅰ（１単位） Studies on Japanese History I	本授業では、日本史の原始・古代、中世、近世、近現代の各分野における最新の専門書や学術論文を読解し、日本史研究の現場ではどのようなことが注目され、なにが議論されているのかを学ぶ。 近年の日本史研究の現場では、弥生時代の開始期が通説の紀元前３世紀に対して紀元前８世紀までさかのぼるとされたり、源頼朝像と伝わる肖像画が実は足利直義を描いたと考えられると指摘されたり、江戸時代の農民統制法令として著名な慶安の触書が実は存在しなかったとされるなど、従来の通説に対して新たな歴史像・歴史解釈が提起されている。なぜこのようなことが起こるのか、実際に専門書や学術文献を取り上げながら考え、日本史研究の現場を知り、日本史について理解を深める。 各回の授業では、各時代の専門文献の探し方や読み方も解説し、各時代に対する歴史の理解を深める。毎回の授業では教員と受講者の間で議論を行い、研究に必要な力を養う。
		日本史研究Ⅱ（１単位） Studies on Japanese History II	本授業は、歴史研究（文献史学）の根幹である史料（古文書・古記録）について、日本史を事例に理解を深めるためのものである。 日本史の研究とは、多くの史料を調査・収集し、解読・分析し、歴史像を構築する営みである。本授業では日本史の中でも江戸時代の古文書を取り上げ、和紙に筆で書かれた文字（くずし字）の解読、その解読を通して活字化された史料の読解、史料の成立事情や内容を考証する史料批判と史料解釈、そして史料から読み取れる歴史像の構築、という日本史の研究現場で行われている一連の過程を学ぶ。 本授業を通して、史料の探し方や読み方、関連する辞書や文献の調べ方という、専門的な技能を身に付けるだけでなく、史料調査・史料解読・史料批判・史料解釈という史料をめぐる日本史研究の一連の過程を体得することで、日本史研究の営みを学び、日本史に対する理解を深める。

区分	英語 対応	科目名（単位）	授業の概要
プログラム専門科目（応用科目）		ヨーロッパ表象文化研究Ⅱ （１単位） Studies on European Culture and Representation Ⅱ	主にロシアを対象に、ヨーロッパ地域を視野に入れながら、19世紀から20世紀における文学・文化を多角的に分析・解説する方法を学ぶ。文学史・文化史の展開を時系列にたどりつつ、ロシア革命やモダニズムなど、各時代に特徴的な社会的事象・方法論を重層的に考察できるテーマを各回に設定し、当該テーマを扱う論文の講読と議論を通じ、多角的に資料を分析する能力を養う。 授業では、論文講読と合わせて、分析対象となる作品・テキスト自体の精読、研究の補助となる一次資料（同時代のメディア、芸術作品、論文等）を分析する。 具体的には、19世紀末のロマン主義文学から20世紀のロシア・アバンギャルド等の作品を題材として取り上げるほか、同時代の関連する社会、思想等の論文や資料を用いて検討する。受講者には、授業で得た知見を元に、領域横断的な視点を設定した上で作品を分析し、その整合性の検証作業も合わせておこなう。
		日本語史と日本語研究Ⅰ （１単位） Studies on Japanese linguistics and History of the Japanese Language I	この授業では日本語学および日本語史の各領域（音声・音韻、語彙、文法、社会言語学、歴史言語学等）のいずれかの領域に関する基礎的な専門文献をとりあげ（参加者の希望により年度ごとにとりあげる領域を選定する）、文献の精読と検討をおこなう。例えば、文法領域の文献をとりあげる場合、「音韻と文法との関係」、「語彙的なものと文法的なもの」「言語の形式」「語形変化システム」等、各回のテーマを設定し、それぞれのテーマにそって演習形式で授業をおこなう。授業活動をとおして、当該専門領域における学問的状況と課題とを理解するとともに、各自の母語の言語変化に関する現象について主体的に観察するとともに、自らが理解、考察した内容を、他の受講者とともに検討できるように整理し、表現する力を身につける。こうした活動をとおして、主体的に研究を進めていくための思考力、表現力の基礎を養うことを目標とする。

区分	英語 対応	科目名（単位）	授業の概要
プログラム専門科目 （応用科目）		日本語史と日本語研究Ⅱ （１単位） Studies on Japanese linguistics and History of the Japanese LanguageⅡ	この授業では「日本語史と日本語研究Ⅰ」で学んだ知識に基づき、言語の通時的变化について実際の言語資料を用いて自ら調査をおこない、現象の背景にある要因について考察をおこなう。具体的には、明治期に書かれた言語資料と現代語で書かれた言語資料の対照分析を通じて、近代から現代における言語変化の実態を観察し、その背景となる要因を日本語学および言語学の方法を用いて考察する。言語変化の一例として、接辞における機能変化、単語における形態変化、単語の意味変化、単語の待遇的価値変化、語彙の社会言語学的変化などがあげられるが、上記の言語資料の対照分析を通じてこれらの諸現象を含むいずれかの現象について参加者自身が課題を選定し、調査をおこなうとともに、言語変化の要因について考察し、その内容を整理して授業時に報告してもらう。
		グローバル時代の学校教育 Ⅰ（１単位） Globalization and EducationⅠ	グローバル化の進展に伴い、学校教育はどのような変容を遂げてきたのか、どのような変革を迫られているのかについて、比較・国際教育学的視点から検討する。具体的には、OECDのPISAに代表される国際学力調査の影響、国際バカロレア認定校の拡大、増加する移民・難民への教育的対応などを切り口として、各国の取組の個別性および普遍性を明らかにすると共に、グローバルな関係性について考察する。その際に注目するのは、多文化に開かれた市民社会の形成という論点である。言語的、宗教的、社会的に多様な背景を持つ諸個人がひとしく尊重されるために必要な改革について、教授言語が母語ではないこどもの教育や正規の学校とは別の体系に置かれている外国人学校などの事例を通して整理する。また、グローバル人材の育成、シティズンシップ教育などの今日的課題を多文化共生の観点から検証し、多文化に開かれた市民社会のありかたについて検討する。

区分	英語 対応	科目名（単位）	授業の概要
プログラム専門科目（応用科目）		グローバル時代の学校教育Ⅱ（1単位） Globalization and Education II	「グローバル時代の学校教育Ⅰ」を受講していることを前提とし、その内容を発展させた講義である。 ドイツにおける理論と実践を中心に欧州の移民教育を比較・国際教育学的視点から分析する。特に、移民背景のある児童生徒の学力向上政策、宗教的多元社会における宗教教育、言語的・社会的・宗教的に多様な背景を持つ子どもの教育に携わる教員に必要な知識・能力という3つの観点を題材として、グローバル時代における学校教育の責務と課題を確認する。これらの今日的課題を含め、ドイツの異文化間教育のこれまでの展開をアメリカにおける多文化教育の歩みと重ねながら把握した上で、欧州レベルの教育政策分析を通じてグローバル時代の学校教育について総合的に考察する。 最後に、日本の現状と課題を国際的視野から検討し、そのあるべき方向性について受講生全員で議論するものとした。
		日本語史研究の諸問題Ⅰ（1単位） Study of the history of the Japanese language I	日本語史に関する論文を精読し、日本語史研究の方法論・考え方を学ぶ。複数の論文を読み比べ、どのような説明が言語変化を説明するに十分なものであるかを考える。そこから発展し、よりよい説明を求めるべく、問題点を指摘する。 加えて、見出した問題点を解決するべく、種々の方法により文献調査を行う。得られた用例を分析し、過去の日本語について起こった現象を実例から帰納的に説明する。
		日本語史研究の諸問題Ⅱ（1単位） Study of the history of the Japanese language II	日本語史に関する論文を精読し、日本語史研究の方法論・考え方を学ぶ。複数の論文を読み比べ、どのような説明が言語変化を説明するに十分なものであるかを考える。そこから発展し、よりよい説明を求めるべく、問題点を指摘する。 加えて、見出した問題点を解決するべく、種々の方法により文献調査を行う。得られた用例を分析し、過去の日本語について起こった現象を実例から帰納的に説明する。
		日本語音声学Ⅱ（1単位） Japanese Phonetics II	演習形式で実施するが、講義も交える。調音音声学（Articulatory Phonetics）の性質上、実践が重視される。留学生が日本語標準語の発音に上達する為に調音音声学を学ぶという主旨のものであり、その発展の段階である。もちろん、日本語母語話者が自身の発音について深く知る為に参加することも可能である。

区分	英語 対応	科目名（単位）	授業の概要
プログラム専門科目	○	多文化共生学特別演習（4 単位） Advanced Seminar in Multicultural Society	指導教員とのディスカッションを基盤にして、専門知識と技能の深化を図る。主な内容は、次のとおりである。 ●多文化共生に関する先行研究のサーベイを行い、体系的に専門的知識を理解する。 ●多文化共生学の視点から、実態を把握し現状分析するための、適切な資料・データ収集や分析手法について演習を行う。 ●設定した課題に対して、理論と実態・実践との往還を深め、成果の取り纏めと発表を行う。 ●主指導教員と副指導教員は、多文化共生学の分野に関連する学生の研究テーマ・修士論文に即して、ディスカッションやリサーチワーク等を行い、専門知識の深化を図る。なお、境界領域・学際的領域の観点から、グローバル・エリアスタディーズや地域人間発達支援学に関するディスカッション等も含む。
	○	多文化共生学特別研究（6 単位） Advanced Research for Thesis in Multicultural Society	「多文化共生学特別研究」は、修士論文研究の遂行過程を総合的に評価して単位を認定するものである。多文化共生学プログラムを専攻する学生の研究テーマは、政治・経済・文化・教育及び言語分野と広範囲に渡るため、授業内容の詳細は研究テーマに合わせて個別に設定される。修士論文の作成にあたっては、到達目標に向けた種々の内容を、研究の進行状況に応じて指導教員の適切な指導のもとに実施するとともに、研究者として必要な倫理観を養成する。2年次前期終了時には、プログラム担当教員の参加のもと、研究成果の模擬報告・発表を行う。世界の様々な国と地域におけるグローバル化と多文化共生に関する現状と課題についての知識を有し、それらの問題構造を理解し、論理的な考察を加えた研究成果を論文としてまとめる。主指導教員と副指導教員は、多文化共生学の分野に関連する学生の研究テーマ・修士論文に即して、ディスカッションやリサーチワーク等を行い、専門知識の深化を図る。なお、境界領域・学際的領域の観点から、グローバル・エリアスタディーズや地域人間発達支援学に関するディスカッション等も含む。